

会社の山仲間と北八ヶ岳の蓼科山～双子山へ山歩きに行ったときのこと。双子池ヒュッテを出たところの林道で、ふと足元に目をやると、動物の死体が転がっている。お、ヤツタ！野ネズミか？　と思ってよく見ると…おおおお～～～ツ　オコジョだああああ～～～つ　いっぺんにテンション100%跳ね上がった比較的新しかったので大丈夫だろうと早速ハンカチに包んでビニール袋に収納。昼前頃に寄ったサービスエリアで保冷材を買って一緒に包む。まあ、車に轢かれたらしく、目玉が飛び出していて頭骨も壊れている可能性はあるものの、それでもオコジョはオコジョ。たとえ死体でも間近で見るとは初めてだ。いやあ　これは今回の山行で最高の収穫である。一応会社の山仲間は、僕がこういう人間であるということは知っている。(団員H.M)

仕事の車で走っている最中に、和歌山市内で、車にひかれてお亡くなりになっている(ネコ、タヌキ、ドバト、キジバト、カラス、アカミミガメ)を発見し、場所を覚えておいて仕事が終わってから回収に向かうことが多いです。(行ったら、すでになかったことも・・・)会社の車なので仕事中の回収は、あのにおいが車に残るのも困るし、同乗者にどんびきされると思うのでしてません。ちなみに同乗者は目が御不自由な方が多い(鍼灸・マッサージ師さん)ため、遺体の確認はされていません。話していて面白がってくださった方がいらっしやいましたので、「アカミミガメが道のど真ん中でつぶれてるの拾ってきていいですか～」って聞いたら「やめてください」といわれました。(団員N.Y)

行く手に動物の死体が落ちています。 あなたならどうしますか 拾う!!

うちの近所で大きな猫が死んでいた。車にはねられたようだ。幸い、周りに人はいない。何気なく近付いて、何気なく猫を拾い、そのまま何気なく家へ入る。そしてそれを持ってあくる日、会社に出勤。ロッカーにしまいこむ。仕事が終わってネコをかばんに入れて博物館へ。冬だったので、誰にも気づかれることは無かった。(団員H.M)

岸和田の駅前である冬の日、ピックアップしてくれる友人の車を待っていました。すると目の前の植え込みの影に白黒のにゃんこが。。少し鼻血を出している程度で、きれいなご遺体。拾いたい・・・しかし現場は朝の通勤時間帯にあたっており、ひっきりなしに車や人が通る。そこで、いかにもそのにゃんこがご存命であるようなふりをして近づき、抱き上げて、「おーおーおーおー、今日は寒いよねええ」などと語りかけながら、硬直したご遺体の様子が分からないように、ゆりかごのごとく優しくあやしつづけた。無論、友人の車にも、あやししながら乗り込んだ。「んー何その猫……ギャー！」(団長N)

会社の工場で、後輩が「Mさん、排水溝でカモが死んでるけど、どうする？」と教えてくれた。勤務中にもかかわらず、拾いに行く、ところを先輩に見付かる。「お前、そんなもんよう拾うなあ。気色悪い」といいながらいやそーな顔をする先輩。「いや、こういうのは貴重ですから」といいながら、番線でフックを作ってカモを引き上げ、レジ袋にいれ、そそくさとロッカールームへ。幸い誰にも見付からず、自分のロッカーにしまい込み、終業を待つ。そして、何くわに顔をして、カモを鞆に入れ、そのまま社バス、電車を乗り継ぎ、博物館へ。(団員H.M)

会社に出勤して、更衣室の玄関前でヒヨドリが落ちているのを発見。私の前後にも人がいたのですが、何気なく何かゴミでも拾うようさと拾い上げ、何事も無いような顔してそのままロッカー室へ。別にあとで何も言われなかったのも、おそらく誰も気づいていなかったはず。(団員H.M)

江坂公園で2羽のカラスがドバトを食べていた。幸い連れがいなかったので骨はもらおうと、公園で遊ぶ子供やママたちの視線がはずれてそうなタイミングでささとビニール袋に回収。カラスから横取り気味。(団員N.M)

朝出勤すると、警備員さんが、「出勤途中に杭全の交差点の南でタヌキが死んでいるのを見ましたよ。」とのこと。すぐにポリ袋をひつつかみ、自転車をとばしました。現場に着いてみると、なんとパトカーが止まっており、お巡りさん2人がタヌキを回収していました。すぐに、「それ標本にするので下さい。」と言ったところ、二人は顔を見合わせて何かぼそぼそ、やがて「では署まで来て下さい。」しょうがないので、東住吉警察まで行き、そこで、しばらく待たされた後もらってきました。タヌキの死体は拾得物ではなくてゴミ扱いだと思うので、すぐにくれてもいいのと思った次第です。(顧問T)

自分で見つけて拾ってくるというのではなく、誰かが見つけたのを「それちょうだい」といってもらう場合、とにかく恥ずかしいと思わず、堂々と申し出ること。(顧問T)

淀川の海老江干潟で保全協会の探鳥会があったのですが、そのとき、干潟に何か黒いものがあつたんです。もしや、と思って近付くと、案の定、オオバン死体。このときは袋が無かったので、参加していた人たちに「誰かレジ袋持ってませんか～」と声かけまくって、2～3枚めぐんでもらい、無事収容。さらにもう一羽、ホシハジロの死体も発見。2羽をリュックに入れて観察会を続行。まとめのときに早速披露して、普段なら双眼鏡かスコープの向こうでしか見れない鳥を、目の前で見てもらうことが出来ました。かなり腐乱してたのですが、特徴はほとんど残っていたので、じっくり観察してもらえました。(団員H.M)

近木川河口で子猫の水死体を拾い、例のごとくビニール袋に入れ、リュックにしまった。(団員H.M)

堺泉北港のナガスクジラ。博物館の外に展示しているやつです。朝刊の隅に乗っていた、「堺泉北港に巨大クジラ」という記事を見て、「ほしーいんですけど」と大阪府港湾局に電話したネイチャー・スタディに書いたもので、それを参照して下さい。(顧問T)

ほとんどの死体は、自宅の猫たちが狩ってきます。3匹の猫は分担（得意分野）があり、タツマキくん♂はねずみ系、パスカル♀はかなへび、じねずみ、ひみず ロンド♀は鳥です。ですから、死体回収は我が家のリビングです。いちど、寝室にご遺体があった時には閉口しましたが、そのとき確かに実習室の香りがしていました。その遺体の数々はとても小さいので、すぐに冷凍庫に入れますが、まとめてから、博物館に送ろうと思って忘れてしまい、冷凍庫の中はぎゅうぎゅうになり、殆ど食料は入らない状態です。あと、最近ロンドは鳥を食べてしまうのですが、必ず、肝臓はのこしています。なぜ？住んでる場所柄大きな死体にも出会います。のうさぎ、いたち あらいぐま、たぬき、リス、ねこへび もぐら などは、いったん確認して、ゴミ袋など持ってない場合はすぐに自宅に戻り、ビニテや、袋を持参し博物館に送るようにしています。最近、近所の郵便局から送ることが多く、窓口の人が、また、標本ね！と言ってくださいます。でも、狭い近所づきあいですから、O家の動物拾いはじわじわと広まっていて 標本＝死体と気づかれないうか、どきどきしているのが本音です。息子の小学校の担任の先生も、通勤途中に遺体を見つけると必ず学校からFAXをくださいます。生きている動物も拾うと、勘違いされて、アライグマがわなにかかっているよと！うちに連絡くださる親切な近所の方もいます。（団員R.O）

最近ホネホネ団が浸透しているので、知り合いから電話がかかってきて「いる？」というのが多いけど、まだホネホネ団に入っていないころ、まだ今の職場に入る前。野鳥の会のMさんがあくあびあにドバトの剥製を展示したがついているという話があった。アサヒビール山崎山荘に遊びに行った所、タイミングよくドバトが落ちていた。山崎山荘の新館の廊下はガラス張りなので、よく当たるらしい。で、受付のおねえさんに「あっちでハトが死んでるんですけど」「まゝ（かわいそうに）」「拾って帰りたいので袋もらえませんか」「え？・・・」お姉さんはちゃんとビニール袋2枚と紙袋1枚をくれました。ありがとう。（団員M.T）

回収に便利ということでは、少し大きなものであればやはりポリ袋ですが、あらかじめ新聞紙でくるんでからポリ袋に入れるのがおすすめです。爪など突起部で袋が破れるのを防げます。（顧問T）

私の住んでいるのは奈良県の山奥の小さな村です。しかし宅急便の集配所は割と近くにあります。必然、ホネ神様が降臨なされた場合はすべて一度ホネ巫女のおうちでこん包し、その集配所から天国へ... もとい博物館へ送られることになります。小さな村ですからもちろん集配所で働いておられる職員の方もそう多くはありません。次から次へ、せっせとご遺体を運ぶうちにいつの間にか職員の方の顔を覚えてしまうようになり、どうやら職員の方も「自然史博物館あてに着払い冷凍クールで段ボールを送る女子中学生」の存在に気づいてしまわれたようで。とうとうある日。ご遺体入りの段ボール箱を抱えて集配所の扉をあけると。。。「冷凍クールでよろしいですね？」「あっはい。」……………あれ？ 完璧に顔を覚えられてしまったようでした…。

またある日は、見かけない職員さんで、どうやらバイトさんのようでした。当然の如くご遺体入りの段ボールを抱えて集配所に行ったのですが、「これ…。段ボールの底濡れてるんですけど中のもの大丈夫ですか？開けて見てみましょうか？もしかしたら何か壊れてたりするかもですし。」「いいいですっつ。だっだだ大丈夫ですっつ。あっえっと洗ったばかりの野菜なんですっつとれたてなんですっつ。だっだからだいじょうぶですっつあっありがとうございますっつ」
あとあとよく考えてみれば採れたてのお野菜を博物館あてに研究資料と書いて冷凍クールで送るのはあまりに不自然だったのではないかと…。（団員F.K）

死体回収のコツ

- ・死んでいる動物をみつけても、すぐに素手でさわるのはやめましょう。宿主を失ったノミやダニが新しい宿主をもとめて右往左往しています。また、人へ感染する病気を持っているかもしれません。ビニール製の手袋などで、すばやく拾うのがコツです。
- ・博物館に寄贈される死体は、学術標本として保存されます。拾った日付、場所（かんたんな地図）、採取者の名前と連絡先を書いた採集メモを死体と一緒にいれましょう。
- ・血や体液がもれる可能性があるため、梱包するときには、新聞紙でくるみましょう。その後、においがもれないよう、ビニール袋を2重にするなどして、魚を送るトコ箱などがベストです。保冷剤があればなおよし。
- ・博物館に寄贈するときには、まずは連絡を。
- ・宅急便で送るときは、品名には「サンプル」「標本」などと書きましょう。

動物の死体を発見した方、博物館に寄贈したい方、なにわホネホネ団についてのお問い合わせは

なにわホネホネ団事務局

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23

大阪市立自然史博物館動物研究室 和田岳氣付

E-mail wadat@mus-nh.city.osaka.jp

なにわホネホネ団

（事務局長による限り無く公式に近い非公式サイト）

<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/wada/honehone/index.html>